

# 少年相談センターを訪ねて

子どもとのコミュニケーションを大事に!

リポーター 近藤 正彦 さん (御成町4丁目)

連日のように新聞やテレビ、雑誌からいやな顔しに入ってくる青少年にかかわる情報。ときには子どもの目、耳を覆いたくなるものもあります。大人の興味本位な事件・事象、中には青少年をターゲットとして仕組まれたもので、次代を担う青少年を守らなければならないのに、汚れた大人の手。昨日の都会の出来事は今日の地方。進む核家族化、少子化、加えて連帯感も希薄になりつつある現在、対岸の話ではなくなってきた。そこで、青少年の悩み、心配ごとなどの相談窓口である大館少年相談センターを訪ねてみました。

**少年相談センターとは**  
同センターは、昭和四十五年七月一日に大館市補導センターとして開設され、青少年、学童、幼児

などの悩み、非行などにかかわる相談などの活動をしてきた。だが、補導の二字がそぐわないとして昭和五十七年七月一日に改名し、現在に至っているとのこと。



近藤リポーター

同センターは田代町、比内町との広域交流をなし、大館に三十人、田代、比内に各十人の街頭補導員を委嘱、巡回や情報の交換をしているとのこと。

また、同センターは、市の教育研究所、家庭教育相談室、福祉事務所との四者で

- ①家庭環境などの心配ごと
  - ②問題行動
  - ③不登校
  - ④その他
- などについて、定期的な情報交換と研修をしている。

## 相談の傾向

大人社会の変化を避けようもなく、もろに被る子どもたち。ましてや戦後第四のピークといわれる社会環境の急激な変化、大人社会の混迷、利己主義化、さらに同センターを悩ませる低年齢化。そんな中でも相談件数は横ばいかむしろ減っているのか?

昨年の上と比べては総数八十一件、その中で、上位はいじめ・友人関係、続いて家庭環境、不登校、非行、異性への関心、その他となっている。いじめの件数はかなり減ってきているものの、依然相談のトップ。表面に出にくい事例を



吉成所長(右)と菊地相談員

思うと心配は消えないという。より一層の心くばりを促したいとす。不登校の話題も尽きない。生活のリズムが年々夜型化の傾向にあり、朝起きれない、目覚めに頭痛がする、夜の間食で朝食が摂れないなどが登校を渋らせ、不登校につながる例もあると指摘する。

昨日の都会は今日の大館。良いことだけがメディアにのるのはありません。安全地帯は今どこに

## 薄い父親の影

相談者は電話か来室で、ほとんどが祖母か母親である。父親の影



最近はこのような姿が見られなくなってきた

は薄いようだ。忙しいとか、母親に任せてあるからというのが理由のようで、寂しい。

最近の子に異変。なお野球人気が高いのにもかかわらず、キャッチボールのできない子が増えてきたという。昔は朝夕、路地や空き地でみられた親子でのキャッチボールが消えたという。子からせがまれても父親はのつてくれない。父親も母親も忙しくなったことは確か。でも人として生きてゆく基本的ルールは親から温かみを通して受け継がれるもの。影が薄いとされる父親の皆さん、体をぶつつけ合ってお子さんとコミュニケーションをとる必要を感じます。子どもは本当に好奇心、冒険心が旺盛です。ボタン一つの掛け違いが大事に至ります。「三つ子の魂百までも」、少子化といわれる現在、二十一世紀の舵とる子どもたちに大人の責任として、善悪を判断できる基と健康な社会を残してやりたいと思いました。大館の子どもたちの大多数は明るく健やかな心身の持ち主と聞き、安心を土産にセンターを後にしました。

心配、お悩みごとは  
ささいなことでも

大館少年相談センターへ  
電話番号 4210769  
フリーダイヤル  
01201110624